

# ポリクリ

大丘 忍

昔、医学部の最上級生になると、ポリクリという授業があった。これは授業というより、診断実習と言った方が適当かも知れない。学生は、五人一組となって、内科、外科、産婦人科などの主要科目をローテーションする。一応、白衣を着て聴診器を持ってるので、外見上は若い医師との区別はつかない。しかし、聴診器のイヤークラスがポリクリ外れるのを見ると、新米であることはすぐに露見してしまう。今の聴診器は、金属製のパイプがついているのでそんなことはないが、昔の聴診器はすべて、釣鐘部分から直接ゴム管が伸びて象牙またはプラスチックのイヤークラスがついているので、これを耳の穴にぴっちりはめ込まねばならない。新米のうちはこれがすぐに耳から外れてしまつたのである。

その日は内科のポリクリであった。助手（中堅医師である）が、その日の大病院に受診した新患の中から、マテリアル（教材）として適当な患者を五名選びだし、それを学生に割り当てる。学生は、その患者から症状を聞き出し（これをアナムネーゼをとるといふ）、診察して診察所見と診断を記載して担当教官に提出するのである。

その日の担当教官はS助教授であった。S助教授は温厚であり、学生には優しいので学生の間の評判は非常によい。しかし、一旦学会の会場に立つと、鋭い質問を飛ばせて演者を震い上がらせると言われている。

学生のN君の担当患者は、太った中年の女性であつ

た。S助教授は、N君がとつたアナムネーゼを一瞥すると早速診察にとりかかった。まず脈を数え、目を見、咽を覗く。頸のリンパ節や甲状腺を調べ、胸の聴打診を行なう。通常の臨床でこんなに丁寧に診察をすると、時間をくつてはかどらないので、適当に手抜きすることになるのだが、学生に診察手順を教えるための診察であるから手抜きは出来ない。

患者をベッドに寝かせて腹部を触診しているとき、S助教授の表情がすこし険しくなった。首をかしげながら何度も同じ所を触っている。S助教授は触診を続けながらN君に尋ねた。  
「ところで、君の診断はなにだね？」  
「はい、肝臓癌です」  
「何？ 肝臓癌？」

S助教授が驚いて振り返つた。  
もちろん、実際には日本語で「肝臓癌」という言葉を使ったわけではない。ここでの医学用語はすべてドイツ語が使われているので、患者には何を言っているのかはわからないのである。  
しかし患者はそのやりとりから、ただならぬ重病だと思つたらしく不安そうにS助教授とN君とを見上げていた。

「何故肝臓癌と考えたんだ？」  
N君は自信無さそうに、  
「肝臓を硬く触れましたので」  
「肝臓が硬く触れる？」

S助教授はもう一度触診を繰り返した。  
「どこに触れるかさわつてみせたまえ」  
N君はおそるおそる患者の腹に触れ、

「これです」

S助教授がそこに触れるととたんに吹き出した。  
「こりゃあ、君、リッペン・ボーゲンだよ」

リッペン・ボーゲンとはドイツ語で「肋骨弓」という意味である。どうやらN君は、皮下脂肪が厚いため、患者の肋骨の下端を肝臓と間違えるというへマをやつたらしい。

通常、肝臓は腫れて硬くなっていなければ触診では触れない。とくに、脂肪や腹筋の厚い場合には触れにくいことが多い。また、触診する医師の技術にも大いに左右される。

S助教授は、N君の報告書に肝臓を触知すると書かれていたのを見て、一生懸命触診したらしい。何しろ、学生が触知する肝臓を、助教授たるものが触知し得なかつたとあつては、沽券にかかわるからである。

「女を見たら妊娠と思え」という格言は、産婦人科はもちろん、内科、外科でも決して忘れてはならない。これを忘れたために誤診した例は枚挙に暇が無い。

その日のポリクリは産婦人科であつた。産婦人科のM教授は、子宮癌における広汎子宮全摘術の術式を考案して名を知られ、その弟子は大勢が産婦人科領域で活躍している。そして内科のI教授と並んで、この大学での恐い教授の双壁であつた。I教授やM教授の前に立つと、学生は勿論のこと、中堅の医局員ですら足が震えるという。

さて、仲間のN君の患者は二十才過ぎの女性であつた。産婦人科のポリクリでは、学生が内診をすることはない。内診というのは、膣鏡を用いた、あるいは膣に指を入れて診察する婦人科的診察のことで、内科診察を略した言葉ではない。だから産婦人科のポリクリでは、学生はアナムネーゼをとるだけであ

り、担当教官の内診結果を聞くということになる。

N君がとったアナムネーゼを読んで、M教授はしかめ面をした。

「君、メンスのことを聞いたかね」

「いえ。聞いていません」

N君の声が震えた。

「何故聞かないんだ。女を見れば妊娠と思え、とあれほど言っておるだろつが」

「で、でも、患者はまだ未婚ですから」

「馬鹿もん。未婚なら妊娠することはないのか！」

「は、はい、いえ。でも……」

N君の顔は青ざめてしどろもどろである。

「うん？ どうじゃ。そつちの眼鏡をかけたの」

教授の矛先は隣のK君に向いてきた。

「はい、性交渉を行なえば、妊娠する可能性があると思います」

K君は眼鏡を光らせて直立不動で答えた。

「なに？ 思います？ 女が男と性交渉をすれば妊娠する可能性があるに決まるつとるじゃろうが。思いますという曖昧な表現でなく、もっと正確にものを言え」

若いポリクリ用の患者をそつちのので、M教授のお説教はさらにエスカレートする。

「だいたい、お前らは、正確にものを考えずに、先入観ですぐにものを言つのがいかんのじゃ」

M教授は、シャツをめくって右腕を出した。

「さあ、これは何じゃ。言つて見ろ」

「はい、お灸の痕です」

肘のお灸の痕を見てN君が答えた。

「だからいかんのじゃ。これがお灸の痕とどうしてわかる？ わしがお灸をするのをみたのか？」

「い、いいえ」

N君の声がまた震えた。

「なら、正しい言い方で言つて見ろ。隣の眼鏡」

「はい、右腕の肘関節部の皮膚上に、ほぼ円形の小指頭大の癬痕があります」

K君は言葉を選びながら慎重に答えた。

「そうじゃ。これは皮膚の癬痕じゃ。お灸をしたという事実が加わつて初めてお灸の痕という判断ができるんじゃ」

そして教授はN君を指さして言った。

「未婚だから妊娠しないと考えるのはとんでもない考え違いだ。女は必ずメンスの状態を聞かなくてはならん。よく覚えとけ」

さて、次のM教授のポリクリの時である。N君が患者に質問している。

「メンスは正常にありますか？」

患者があきれ顔で言った。

「メンスちゆうと……、ああ、月のものことですか。そんなもん、ありますかいな。わて、七十才どつせ」

まあ、ここまでくると笑い話であるが、そのN君は、今では立派に四国で病院長を務めている。